

天空の芸術祭

2025

浮かぶ地層



天空の芸術祭2025——浮かぶ地層

天空の芸術祭 2025 —— 浮かぶ地層

2025 浮かぶ地層

「天空の芸術祭」は、東京藝術大学と長野県東御市、地域の方々が連携し、アートの力を活用した地域づくりを推進する域学連携事業として2016年から継続しているものです。地域の文化資源を再評価・再活用し、地域の活性化と文化的・芸術的な人材育成を図ることを目的としています。

本事業は地域の方々の参画を通じて地域本来の芸術的価値を可視化し新たな地域資源として活用する展示と、中学生や地域の方々を対象とした絵画・鑄造体験等のワークショップ／レクチャーによる人材育成、そして評価や変化を整理・共有して継続可能な仕組みと長期的な事業設計へつなげる取り組みの3つの柱を主軸に実施するものです。

第9回目となる「天空の芸術祭2025」は、主に北御牧地域の市内各所を舞台に、大学院美術研究科の油画第2研究室・油画第5研究室・鑄金研究室を中心に、教員と大学院生18名が作品を制作・展示し、開催されました。

| | | | |
|----|------------------|--------------------------|---------------------|
| 4 | ごあいさつ | | |
| 6 | アクセスマップ エリアマップ | | |
| — | — | — | — |
| 8 | 図版 | A-1 | 澁谷弥月稀 |
| 10 | | A-2 | 高井爽 |
| 12 | | A-3 | 本田奈々 |
| 14 | | A-4 | 村山心南 |
| 16 | | A-5 | 伊藤奏美 |
| 18 | | A-6 | 大谷さやか |
| 20 | | A-7 | 福岡桜子 |
| 22 | | B-1 | 高松優人 |
| 24 | | B-2 | 日向慶次 |
| 26 | | B-3 | 中野有華 |
| 28 | | B-4 | 沓澤真也 |
| 30 | | C | 田沢陽菜 |
| 32 | | D | 津田弘人 |
| 34 | | ・ | インフォメーション／プロセス・作品展示 |
| — | — | — | — |
| 38 | 関連企画 | ワークショップ『あなたの話を聴かせてください』 | |
| 44 | | ワークショップ『色々な素材に触れて描いてみよう』 | |
| 46 | | オープニングイベント 作品解説バスツアー | |
| 47 | 同時開催 | 『みんなの作品展』『ココノビジュツ』 | |
| 48 | 広報・メディア掲載・来場者数 | | |
| 49 | ToC評価ワークショップ実施報告 | | |

[凡例]

- ・ 図版頁左上に記載された作品の詳細は、上から「作品タイトル」「制作年」「素材」「サイズ」の順で記した。
- ・ 同じく、図版頁右上の作品解説文については、各作家から提供されたものをそのまま掲載した。

天空の芸術祭は、東御市の自然や歴史、暮らしの中に重なり合う多様な価値を、芸術の視点から丁寧に読み解き、地域の新たな可能性を示してきた取り組みです。2025年度は、テーマ「浮かぶ地層」のもと、土地に刻まれた記憶や時間、人々の思いが現在へと立ち上がり、作品や対話を通じて共有される質の高い実践が積み重ねられた1年であったと受け止めております。

本芸術祭の企画・運営に携わられた東京藝術大学の先生方、学生の皆さま、そしてワーキンググループの皆さまの継続的な挑戦と真摯な取り組みに、深く敬意を表します。市といたしましても、本芸術祭が地域と芸術を結ぶ重要な場として、今後さらに発展し、次代へとつながっていくことを大いに期待しております。

花岡利夫〔東御市長〕

東御市と東京藝術大学、そして地域による域学連携事業として9回目を迎えた天空の芸術祭を、無事終了することが出来ました。藝大の先生方をはじめ、地域の多くの方の献身的なご協力の賜物と厚く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2025年1月に初めて藝大を訪問させていただき、今年の開催のあり方などについて協議をし、昨年の振り返りから問題点や課題の整理をし、要所要所の考え方などの擦り合わせをいたしました。

4月に会場候補地のリサーチから始まり、宿舎や展示会場の確保など課題が数多くありましたが、皆様のご協力のお陰で整理解決してきました。限られた候補地の中で、藝大の皆さんも選定に苦労されたかと思います。とりわけ、今年度から藝大OGの阿部穂香さんが地域おこし協力隊員として赴任され、以前にもこの芸術祭に学生として参加出品されていたこともあり、藝大の皆さんとの連絡調整がスムーズに運営された事は大変良かったかと思います。

今年度は、毎年参加の油画第5研究室、昨年度から引き続き油画第2研究室、昨年はワークショップでの参加だった工芸専攻鋳金研究室のみなさんに出品して頂きました。これまでより参加作家も多くなり展示作品が数多く、この芸術祭が益々充実された事は特筆な出来事であったかと思うところです。

また新たな取組みとして、地域作家による『ココノビジュツ』展も地域で創作活動されておられる方の協力により、開催する事が出来ました。従来から継続してきた小中学生の作品展も開催され、普段学校へは中々行く機会も無い地域の方などから、それを鑑賞出来る事に感謝の言葉もいただきました。北御牧中学校の皆さんとはワークショップも開催され、交流も深まりました。

私たちや地域の協力者も多くの藝大生の皆さんと交流することが出来、人と人がアートを通じてつながり、地域に住む私たちと外からこの東御市に来られる人々の新たなふれあいが、この地域の活性化と地域の文化意識の向上に必ずや役立つものと思います。

最後になりましたが、多くのご協力者、ご賛同いただきました企業の皆様に厚く感謝申し上げます。ありがとうございました。

荻原輝久〔天空の芸術祭2025ワーキンググループ代表〕

天空の芸術祭2025のテーマである「浮かぶ地層」。これは、これまで天空の芸術祭で取り組んできた再生や身体性、地理的・思想的な座標の探求といった主題を継承しながら、より深く地域性や個の内面に向き合うことを目指すものです。ここでいう「地層」とは、物理的な土地の重なりだけを指すのではなく、記憶や歴史、身体感覚、そして語られなかった思いや声が幾層にも折り重なった存在として捉えています。私たちは何を記憶し、何を忘れてきたのでしょうか。その積み重ねのなかで、私たちはいまどの位置に立っているのでしょうか。本展は、その問いを鑑賞者一人ひとりの身体と時間のなかに立ち上げることを目指して構成いたしました。展示の構成においては、見ること見られること、触れること触れられることといった双方向的な関係性に焦点を当て、身体と環境が接触し、交感する状態を複数の作品を通じて提示しました。作品は一方向的に鑑賞される対象としてではなく、鑑賞者の存在に応答し、関係を生み出すものとして立ち現れることを意図しています。鑑賞者が場に身を置くことで、空間に染み込んだ記憶や、語られることのなかった歴史が静かに浮かび上がり、鑑賞者の内面に新たな問いが生まれる—そのような体験の連鎖を、展示全体として生み出すことを試みました。

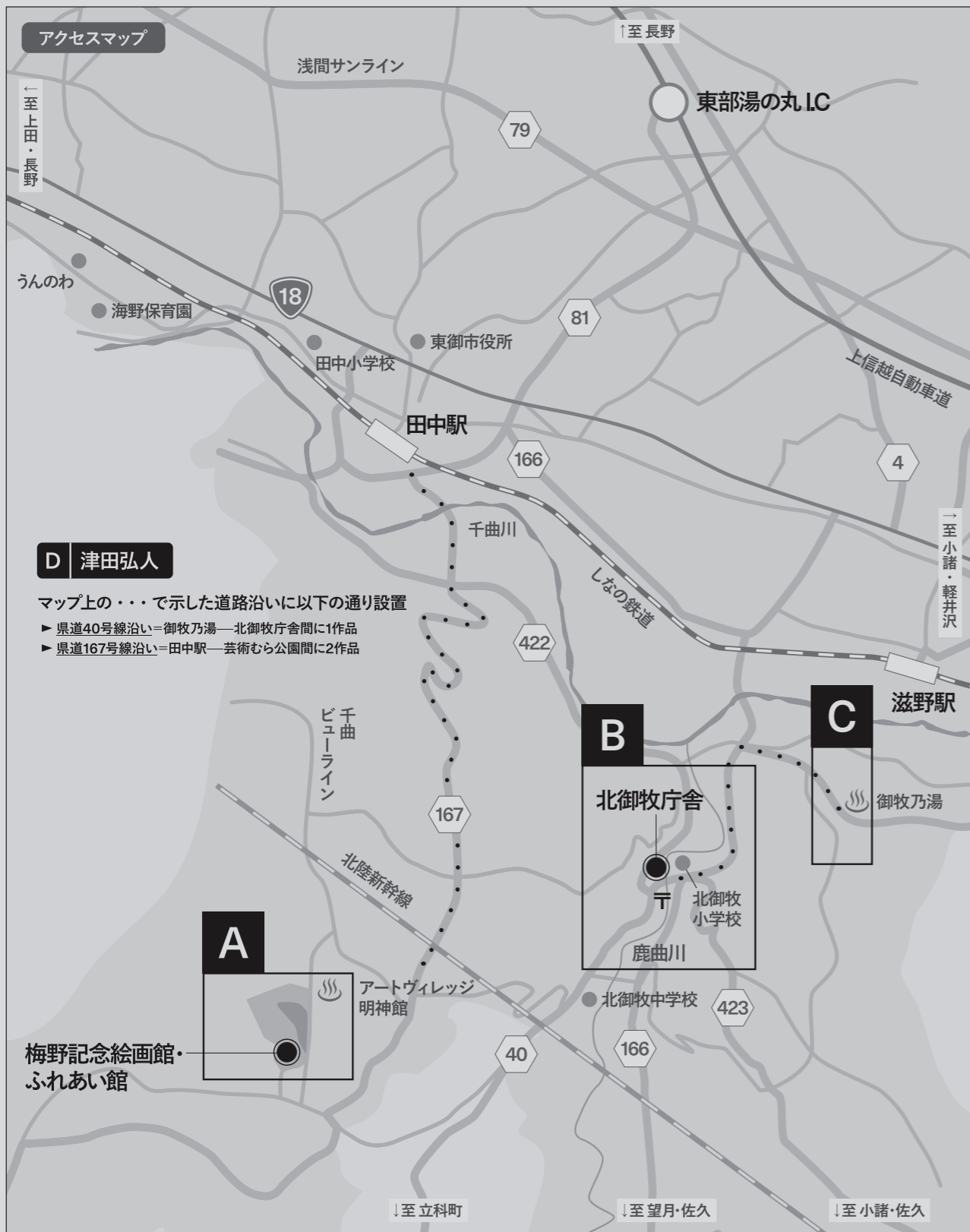
また本展では、鑑賞者が作品と場のあいだにある余白に立ち止まり、自身の身体を通して記憶や風景と触れ合うことを大切にしました。解説や情報を過度に固定化するのではなく、あえて解釈の余地を残すことで、鑑賞者が見えないものに耳を澄まし、語られなかった声を聴く姿勢へと導かれることを期待しました。展示期間を通じて寄せられた反応には、個人的な体験や過去の記憶が呼び起こされたという声、土地の見え方が変化したという声、作品を介して他者との距離感が更新されたという感想などが見られ、「浮かぶ地層」というテーマが鑑賞体験のなかで確かに動いていたことがうかがえました。

東京藝術大学と東御市は、地域における芸術の実践および教育において、これまで関係性を築いてまいりました。今年度は、これまでのプロジェクトにより積み重ねてきた経験とネットワークを基礎に、制作・展示・対話の各プロセスを通じて、地域資源への新たな視線を獲得する機会となりました。学生にとっても、地域の歴史や生活の層に向き合いながら表現を組み立てることは、制作技術の習得にとどまらず、調査、対話、倫理、記録といった実践知を学ぶ重要な教育機会となりました。さらに、作品が地域にすでに存在する文化資源と交差し、鑑賞者の経験として更新されていく過程は、「地域の特性を活かした芸術活動を行い、新たな地域資源として活用していく」という本芸術祭の理念を、あらためて具体化するものになったと考えております。

一方で、今後に向けた課題も明らかになりました。展示空間の情報設計や記録のあり方、鑑賞体験の受け皿となる導線づくり、継続的なアーカイブの整備、関係者間の知見共有の仕組みなどについては、次年度に向けて改善・発展の余地があります。今回得られた手応えと反省を踏まえ、作品と場、鑑賞者と地域、教育と実践がより豊かに結びつく運営体制を検討し、天空の芸術祭の取り組みを一層深化させてまいります。最後に、本プロジェクトを進め、本展を開催するにあたりご尽力をいただきました天空の芸術祭ワーキンググループの皆様、東御市の皆様、地域の関係者の皆様、そして制作・運営に携わった学生の皆様に、心より御礼を申し上げます。多くの協働と支えによって、本芸術祭は、地域にすでにある文化資源に視線を向け、それを未来へとひらく実践の場として成立いたしました。今後とも引き続き、ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

東京藝術大学大学院美術研究科

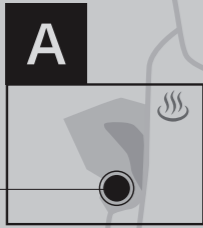
絵画専攻油画第2研究室・第5研究室、工芸専攻鋳金研究室



D 津田弘人

マップ上の・・・で示した道路沿いに以下の通り設置

- ▶ 県道40号線沿い=御牧乃湯—北御牧庁舎間に1作品
- ▶ 県道167号線沿い=田中駅—芸術むら公園間に2作品



梅野記念絵画館・ふれあい館

[関連企画・ワークショップ]

あなたの話を聞かせてください
—「みらい」と「いま」のあいだの物語
日時: 2025年10月25日[土] 14:00-17:00、
26日[日] 10:00-12:30
会場: 梅野記念絵画館・ふれあい館
※事前予約制

[同時開催]

北御牧小・中学生作品展
『みんなの作品展』
期間: 2025年10月6日[月]—11月7日[金]
時間: 8:30-22:00
会場: 北御牧庁舎1階市民交流サロン
※会期中無休・観覧料無料

東御市民による作品展
『ココノビジュツ』
期間: 2025年10月18日[土]—11月8日[土]
時間: 10:00-17:00
会場: 東御市商工会議所北御牧支所
※金土日祝日のみ開催・観覧料無料



A 芸術むら公園エリア

梅野記念絵画館・ふれあい館(総合受付)

A-1 澁谷弥月稀

A-2 高井爽

関連企画WS
あなたの話を聞かせてください

総合受付

A-3 本田奈々

A-4 村山心南

A-2 高井爽

A-5 伊藤奏美

A-6 大谷さやか

A-7 福岡桜子

0m 50m 100m



B 大日向(おおひなた)エリア

北御牧庁舎

B-1 高松優人

B-2 日向慶次

同時開催
『みんなの作品展』

畑
B-3 中野有華

北御牧小学校

北御牧小学校前地下道
B-4 沓澤真也

東御市商工会議所北御牧支所

同時開催
『ココノビジュツ』

0m 50m 100m



C 道の駅みまきエリア

島川原能舞台

C 田沢陽菜

0m 50m 100m

《途》
2025
ステンレス
250mm×400mm×200mm



東御市は文化と文化の交流地点。人々の積み上げた歴史や文化の創発を、鹿の角が方策を持ちながら永久に広がっていくという仕組みと掛け合わせて造形を取り入れ表現した。



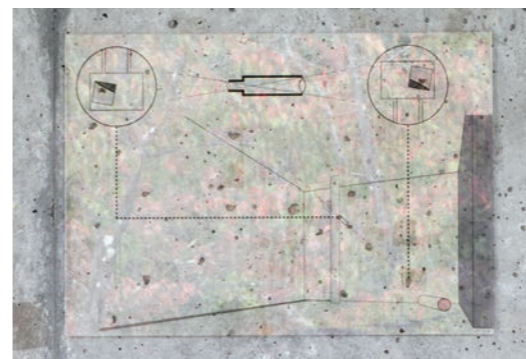
《虫と円柱》

2025

ケプラー式望遠鏡、梅野記念絵画館小憩室の丸柱、明神池の注意看板、配管用金具、アルミ複合板にUV印刷、アクリル板にUV印刷、塩ビパイプに塗装、等
2300×1000×215000 mm



部屋の中に一本だけ、丸い柱が立っている。外を見渡すと、緑の景色が広がっている。木々の間を抜け、大きな池を越えていく。そして足下に、ある虫の死骸を見た。ガラス張りで密閉されているはずなのに、どこからか入り込んでいる、不可解なこと。虫は生物であり、有機的、反復不可能なもの。円柱は人工物であり、無機的、反復可能なもの。それらは、この部屋における対比関係を象徴し、語りの糸口となる。ある場所で発生する邂逅によって、場所そのものの見え方が変容する。それは知らない土地にやって来た自分、あるいは鑑賞者もまた、見る・見られる関係の中で、奇跡のように幸福な不具合を発生させる。そんな可能性を求めて。



《残光の座標 —光の行方—》

2025

色鉛筆、木材、ビス

サイズ可変



芸術むら公園の芝生に一時的に現れる杭は、日中に太陽光を蓄え、夜にその光を空へと放つ。展示後、杭は姿を消すが、放たれた光は宇宙を旅し、あの時あの場所に在ったという痕跡を未来へ刻み続ける。誰にも気づかれず、意味を持たないように見える行為も、自然の大きな流れに沿い、循環の一部として世界と関わっていく。ただ環境の影響を受けるだけの受け身な存在ではなく、自然の流れに加わっていくものとなる。



《よみがえる御牧》

2025

木材、桐油、アクリル絵具、柿渋

サイズ可変



平安時代末期まで、朝廷や貴族に貢進する馬を育てる御牧が御牧ヶ原大地一帯（東御市、小諸市、佐久市と3つにまたがる台地）にあった。

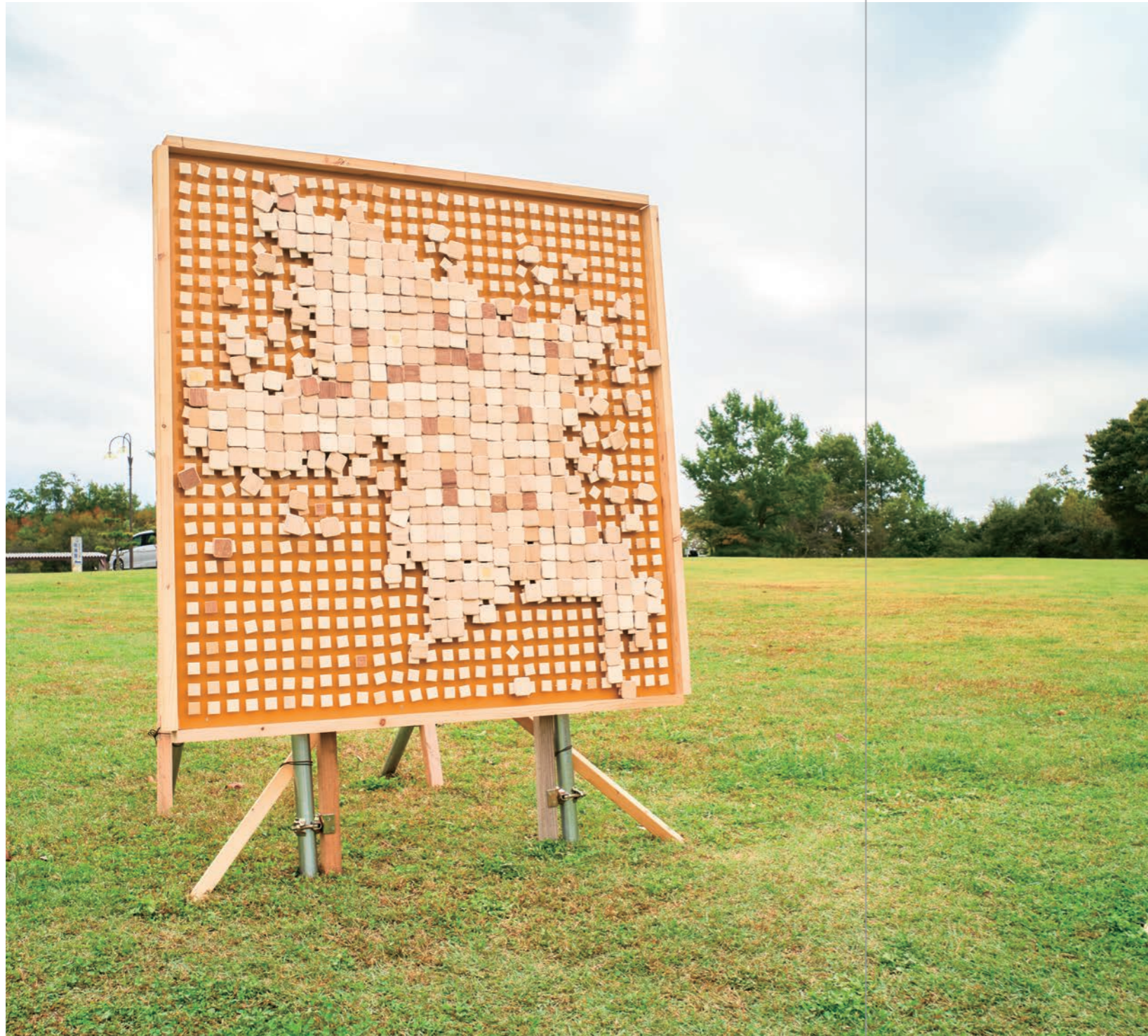
実際に御牧原にある史跡望月牧と野馬除に行った。山間にずっと続いているかのような広大な地に、700頭以上の和種馬がいたという史実に衝撃を覚えた。

今回、芸術むら公園の芝生広場で再現を試みる。ゆったりとした傾斜に、数本の木が固まって植えてある芝生広場は、馬に必要であった環境としてかつての御牧と重なる。傾斜は馬の足腰を鍛えさせ、木の集まりは疎林として馬の休める場所となった。

そのような広い緑豊かな芝生広場に、自分が制作した馬がいたらどのような景色になるのだろうか。



《動く境界》
2025
木材、単管パイプ
1600×1500×200 mm

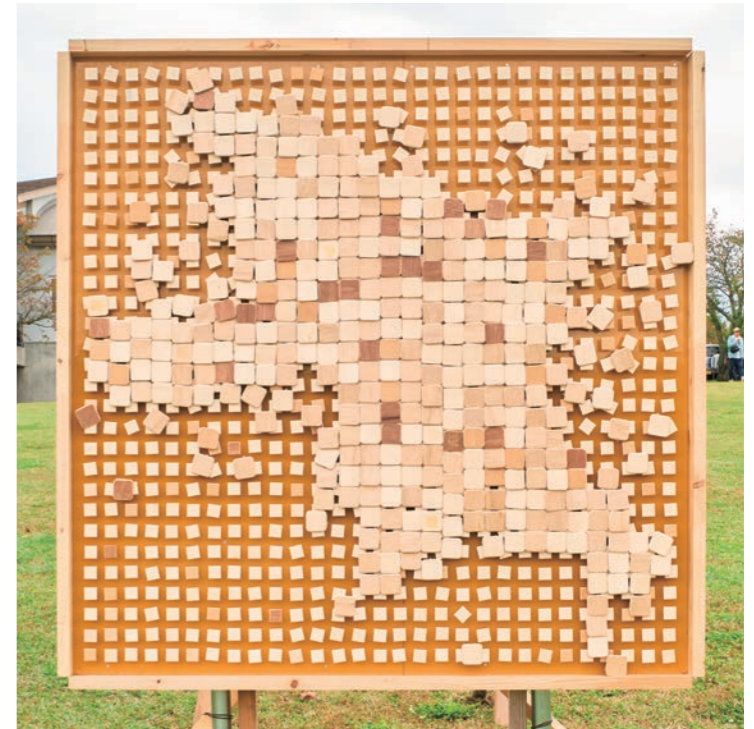


東御市は2004年に小県郡東部町と北佐久郡北御牧村の2町村が合併して誕生した、比較的新しい市である。

天空の芸術祭のためにリサーチをしていく中で、昔からここに住んでいる人たちの話を聞いていると、東御という言葉聞く機会がほとんどなく、多くの人が北御牧と呼んでいることに気付いた。

天空の芸術祭のような出来事をきっかけに、外から来た人間が多く訪れる。その人たちにとってはこの土地の名前は最初から東御であり、彼らとの接触を繰り返して北御牧は少しずつ東御になっていくだろう。私たちが今していることは、北御牧が東御に変わっていく大きな動きの中の1つなのではないかと感じ、そこで、北御牧を模した形に鑑賞者が手を加えていく作品を作ろうと考えた。

あなたの目の前にあるこのパズルは、押し込んでスライドさせることで自由に動かすことができる。好きに動かして遊んでほしい。



《時を铸る》
2025
真鍮
900×1000 mm



铸造は単なる造形の模倣ではなく、失われたものの痕跡や形にならない記憶、感覚を物質に浮かび上がらせる行為だと考える。かつて東御に生えていた伐採木を素材とし、铸型に置き換え、铸造することで消えゆく景色や時間の気配を映しとる。かつてそこに存在した風景や記憶が見えなくとも、木の痕跡を铸造という手法を通して浮かび上がらせることで、鑑賞者にその土地に蓄積された時間の層に想いを巡らせてほしい。そしてその行為が、私たちが生きる場所や物事との関係性を見つめ直し、「今そこにあるもの」の背景にある、静かで深い物語に目を向けるきっかけになればと思う。



しばしば現代の生活に鬱屈し、肉体が精神を置いてけぼりにする事がある。この作品はそういった感覚から離れ、人が人であり続ける為に肉体と精神を同期させることを指針に制作した。

この土地の特性である風がよく吹く事と強い日光による木漏れ日が織りなす影の造形を利用した作品である。デジタル化が進み建物の中でことが済む生活の中で、自室のカーテンに癒されるように、紙媒体の書籍に拘りを持ち続けるように、目の前のことを見つめて咀嚼をする時間を過ごすことに焦点を当てている。

作品に記載されている文章は作者が書いた風についての日記から抜粋したものである。

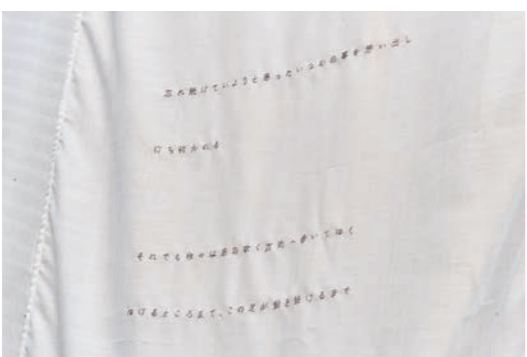


《生活のこと》

2025

布、糸、ワイヤー

2800×3000、1500×1000、1000×2000、
1800×600、3000×700、1500×2500 mm



むかしむかし、とある国に棲む猿たちは、互いに花を贈り合いその行為を通して愛を確かめてきた。花は単なる飾りではなく、絆を結ぶ祈りそのものかもしれない。その姿を目にした人々は、猿たちを獣ではなく神意を映す存在として崇め奉るようになったという。愛の交わりが信仰へと転じ、やがて伝承となって語り継がれる。私はこの寓話をもとに、愛が種を超えて広がり、信仰や祝祭に変容していく瞬間を造形として示したい。そしてこの物語を通じ、人々がかつて刻んだ「絆の繋がり」を今一度心に思い起こしてくれることを、ひとつの願いとして託している。



《春猿携花深誼》
2025
ブロンズ、岩絵具
1200×600×300 mm



《素朴な祠の群れ》

2025

木材

300-1000×70-200×70-200 mm



「何かを残そうとする場には必ず重層的な時間の掻き跡があり、そこに自然的な振る舞いがあることでこの風土の生活が練り続けられているものだと感じる..」

この文章は3年前の天空の芸術祭のサーチで感じたことであり、当時のキャプションに掲載した冒頭文でもあります。東御には多くの祠があり、それら1つずつが生活に溶け込んでいる。そこにある種の土地性、ひいては精神性を感じ取ることができます。この場には変わらずこの土地を愛するように祠が存在し、3年前にも感じていた妙なる慈愛の感情が今もお漂っているように思えます。この場を借りて誰かの自然的な振る舞いの一部になるようなものを作りたいと思っています。



《道をつくる》
2025
石、草、鏡、布ほか
可変



そこはたくさんの石があり、後ろには小さな山があった。夜に訪れると、街灯の光は奥まで届かず、少し怖さがあった。空には人生で初めて見る流れ星がゴーと火花を散らして横切った。蛍もふわっと舞った。暑い日に訪れると、人の痕跡がより見えてくる。抜かれても生え続ける雑草、土に埋もれた毛布、静かに佇む石仏。ここは南上ノ平遺跡(※註)だと知り、地面を掘れば何が現れるのだろうかと思った。この場所に、私の記憶と重なる道をつくる。歩くことで、かつて見た景色が土の上に残っていく。歩くたびに目に映る景色は少しずつ変わり、その変化も土の上に重なり、層になっていく。

註=出典：東御市『東御市遺跡分布図』平成20年3月作成

《Mirrors only know Mimaki, but don't know》
2025
銀塩プリント



北御牧の風景を覗き込む無数の鏡。この地下道へと続く7本の道に沿って点在する250ヶ所を越える道路反射鏡は、流れ続ける時間とまちの変化、通りゆく人々を瞳に映し続ける静かな観測者である。彼だけが知り、こちらに向けることのできる何気ない風景。車社会であるこの地域では、一瞬だけ見えるか見えないか、過ぎ去られる鏡面の中の世界。その断片が繰り返されると、この土地の似姿が立ち上がる。その姿はやがて、私たちの記憶と交わり、北御牧であり、北御牧ではないどこかへと誘う。



《風を孕む》
2025
木材、ほか
サイズ可変



ある日、田植えが終わり休憩していると、コンクリートの道路上に突如つむじ風が舞い上がりました。ほんの数秒程度の出来事でしたが、島川原の能舞台から見える風景を見たときにふと思い出しました。それは場が持つ雰囲気からか、それとも地形が織りなす蓄積物からか、何がそうさせたのかは未だにわかりません。今回は、そんなつむじ風を頼りに、東御の地を通じて見えてきた、それぞれの現場との接面について考えていきます。



《タイムラグ》
2025
アルミ複合板、木材
1300×300×50 mm



私は普段車で移動していて実感のない、東御市の土地の形を確かめるべく、自転車によるリサーチを行いました。結果は想像以上に険しく、途中で断念しかけるほどでした。この経験から車に乗っていて気が付かなかった東御市の本来のかたちをそれぞれの移動時間の載った看板によって示します。作品は天空の芸術祭で展示しているエリアの中間地点に設置され、それぞれ場所を指し示す役割を持ちます。運転中にこの看板を見た時、車の想定時間だけが必要であり、他の想定時間は東御という町の険しさを伝えるために機能しています。



[概要]

日時=2025年10月18日[土]—11月8日[土] 10:00-17:00

会場=梅野記念絵画館・ふれあい館

天空の芸術祭2025「浮かぶ地層」では、梅野記念絵画館・ふれあい館を全体展示の入口に据え、ここでそれぞれの作家のテーマを共有し鑑賞の準備を整えてから、市内各会場へ向かう回遊の流れをつくりました。

ふれあい館では、出展作品の制作過程がわかる資料・関連作品や、作家の過去作品を展示しました。併せて、土地の時間と暮らしの積層としてテーマをとらえる短いテキストを作品情報に添え、制作の手がかりや直観を得た場所のことなどが伝わるよう展示しました。鑑賞者が自分の見方を見出せるよう、情報を押し付けない配置を心がけました。

完成形だけでなく、調査・試行錯誤・地域とのやりとりを含む制作過程を大事にし、スケッチやメモ、試作、素材、設計図、調査写真なども提示しました。過程における変化や思考の跡も含め、土地と向き合い少しずつ形になった時間を共有しました。

背景を知って巡れば景色や光、音、距離感が意味と結びつき、その後に戻れば資料が振り返りとなって見え方が更新され、行き来が循環する体験を促しました。ふれあい館を始点としたことで、点在する作品を巡ってつながる展覧会として立ち上がりました。



津田弘人
《これまでの展示カタログ》
2023-2024
本
B5、A4サイズ



高松優人
《月夜葦》
2022
ブロンズ
120×250×250 mm



高松優人
《記憶の座標による愛撫》
2022
岩絵具、透明水彩、アクリルガッシュ
364×515×20 mm



中野有華
《道をつくる》制作記録映像
2025
ディスプレイ
45分



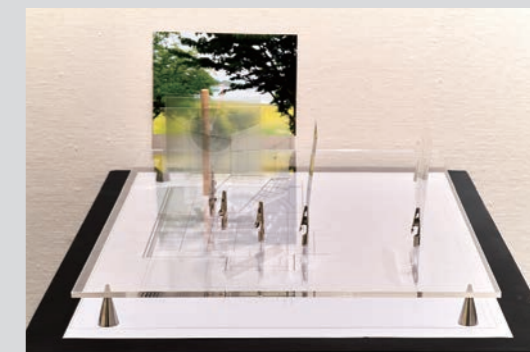
西村雄輔
《The Ones Who Swim》
2025
土標本、ドローイング
サイズ可変



五十川祐
《Stratum》
2018-2025
木材にUVプリント、昨年度に東御市在住の方からいただいた写真
69×438×40 mm、76×152×20 mm、30×156×39 mm



村山心南
《あける喜びと感謝》
2025
木材、アクリル絵具、柿渋、
ミクストメディア、インクジェットプリント
190×220×350 mm、295×671×200 mm



高井爽
《「虫と円柱」のドローイング》
2025
木製パネル、紙、ペン、等
515×363×20 mm、150×363×515 mm



本田奈々
《ドローイング》
2025
木材、紙、色鉛筆
サイズ可変



小瀬村真美
《習作-The Coming》
2024
Giclee-print
380×325×55 mm、354×600×30mm



沓澤真也
《Act.5》、《Act.6》、《Act.8》(図版は《Act.6》)
2024
キャンバスに油絵具
273×455mm、333×530mm、220×333mm



金孝眞
《The Opposite Force (Levitation Motifs)》
2025
ブロンズ、黒味銅
W520×D550×H520 mm



伊藤奏美
《隙間》
2025
石膏
200×300×100 mm



大谷さやか
《ハーバリウム》
2022
真鍮、シルバー925、フォトフレーム、針
127×89 mm



福岡桜子
《Black sheep, may you sleep in a warm place》
2025
ブロンズ
150×250×150 mm



三枝一将
《Re-surface (ug02)》
2025
高錫青銅
460×320×150 mm



遊谷弥月稀
《叙事詩》
2022
シルバー925、真鍮
250×10×10 mm



日向慶次
《天の習作 no.3》
2025
木材
600×300×100 mm



田沢陽菜
《ドローイング》
2025
石
サイズ可変

| | | | |
|------------------|---------------------|----------------|---------------|
| 指先で確認する小柄な男 | 眼鏡に息をかける老人 | 影を踏む子 | 夜を笑う人 |
| ネイビーブルーのTシャツの人 | 明かりを見つめる人 | 出口を探す人々 | |
| カーテンの開いている家の主人 | 革ジャンのポケットに小銭をしまう男 | 窓口の女性 | |
| 空席のおとこ | 同じ車両のスーツ男 | まっすぐな髪の子 | 昨日の番組の料理家 |
| スカウトを待つ女の子 | 膝に落ちたパンくずを払う女性 | ゆっくりドアを開ける訪問者 | |
| 立ち止まる宅配員 | 終わりを祝う人たち | スピーカーの音量を下げる女 | 巻き尺を投げる女 |
| タータンチェックの男 | 赤スウッシュのエアフォースの男 | 割れたふくらはぎの女子高生 | |
| 本の折り目を嫌う女 | 水滴をのばす女 | 上唇を噛む人 | 斜め掛けの中年女 |
| かかとを浮かす女の子 | 展示室の入口ですれ違う彼 | 看板に目をやる彼女 | |
| 割引券をくれた無口な老女 | ビニールシートの端をそっと持ち上げる人 | 炭酸水で軽くうがいする男 | |
| 他人の記憶を蒐集する中年男 | 合わせた掌を離してみせる人 | 白い杖の男 | 前髪をそろえた女 |
| 言葉を飲み込みみずをかじる女 | 鏡越しにサインを送る女 | 0の数を数える男 | |
| 両手で喋るグループの男 | 正解に耳を塞ぐ男 | スーツケースを転がす女の子 | |
| 三つ編みツインテールのおとな女子 | 垂直に首を振る男 | カウンターで眠る女 | 点滅に諦めない人 |
| 少し間を置いて口角を上げる女 | 見覚えがあるとってくる初対面の男 | 着信履歴の女 | |
| ネームプレートを確認する乗客 | うっすら口を開けて堪える男 | 焼け具合を箸で確かめる男 | |
| 小銭を数えて渡す男 | 薄いカーディガンを羽織った女 | 水を運ぶ人 | 点滅に諦める男 |
| 手に取った写真をじっと眺める人 | 色ペンを貸してくれた人 | 冒頭に登場する女 | |
| 真ん中のショートボブの娘 | ヘアピンでとのえる女 | 画面越しに目をそらす女優 | |
| 溜息を呑み込む男 | 滑るように階段を下りる女 | 常連の男 | 溶けるのをじっと見つめる男 |
| ホームの先に視線をやる老夫婦 | 左手を添える女の子 | 四角い空に目をやる男 | |
| ベン先から出てきた人々 | 水平に首を振る女 | 前髪を気にする女の子 | ストローに逃げられる男 |
| 買ったものはその場で食べる女 | 左袖で口を拭う子 | 右下の日付に目をやる男 | |
| 画面越しに話しかけてきた人 | 胸元のソースの染みを終始気にする男 | 口角を上げ歩み寄る店員 | |
| 楕円眼鏡のページュの人 | 指先を隠す女子学生 | サイドテーブルに本を伏せる人 | |
| 伏せられた頁で待機するスーツの男 | 赤い列車を見送る男 | カメラにポーズを向ける子 | |
| 綿埃を連れて歩く女 | 無策のまま三行後に捕まる男 | 一滴垂らす男 | 新番組のゲストの若手俳優 |
| ビニール袋を左手に持ち替える人 | マグカップのココアを両手で吸る女 | 屈んで水量を確かめる女 | |
| 目的の階数を鍵先で押す男 | 指先で背表紙を弾く人 | 犯人役を引き受けた人 | 発券機の横の案内人 |
| 左指で右手甲を抓る女 | 自動販売機を見上げる男児 | 親指で文字を打つ男 | |
| 一枚ずつ捲って食べる人 | 一番奥の席で珈琲を注文する男 | ずっと息を吸い込み喋りだす女 | |
| グラスを回し鼻先に運ぶ男 | 乳白色の煙を吐き出す女 | 水溜まりを見つめる子 | |
| 座席の下で足を組む中年男 | ペパーミントブルーのワンピースの人 | | |
| 肩に乗せた傘を回す子 | 左肩甲骨を摩りながらコートに向かう女 | 水を薄める人 | |

《固有名詞を持たぬ者たち》2021-

土屋貴哉(美術家)

言葉による作品シリーズ。本作品は、独立した短いフレーズの集合体であり、その数は1,000を越える。これらフレーズは、土屋がこれまでに目撃(出会い)してきた人々への私的観察記憶に基づいている。それは現実界での対面的なものに限らず、放送・上映・会話・印刷など媒体を通じた間接的なもの、夢・演劇・歌の視聴など虚構界でのものも含み、直接／間接、現実／虚構でのあらゆる出会いと存在が等価値に扱われている。私的記憶に基づく名も無い抽象的存在は、あなたの私的記憶と接続した途端に、その存在は時空を越えて繋がり普遍的存在へと姿を変える。会場に設営された抜粋約100フレーズの鑑賞が、ワークショップの導入であり出発点となった。

関連企画|ワークショップ

あなたの話を聴かせてください ― 「みらい」と「いま」のあいだの物語

〔概要〕

日時＝2025年10月25日〔土〕14:00-17:00、10月26日〔日〕10:00-12:30

会場＝梅野記念絵画館・ふれあい館

講師＝土屋貴哉(美術家)、村久保雅孝(臨床心理学者)、田口友美(音楽療法士)

参加者＝東御市に現在または過去にゆかりのある高校生以上の参加者(定員12名)

本ワークショップは、美術家・土屋貴哉、臨床心理学者・村久保雅孝、音楽療法士・田口友美の協働により、東御市にゆかりのある参加者とともに実施されました。

本実践は、対話・身体感覚・音を媒介としながら、個々人の経験のうちに沈殿している土地との関係性を、言語化以前の感覚レベルから立ち上げ直すことを目的としたものです。方法論的な基盤として、本ワークショップでは、主体が能動的に何かを生み出す／受動的に何かを受け取るという二項対立を超えた「中動態」の視点と、未来の立場から現在を語り直す「アンティシペーション・ダイアログ」の考え方を参照しました。これにより、参加者が意図的に「語ろうとして語る」のではなく、「語りが生じてくる状態」に身を置くことを重視した構成としました。

ワークショップの場は、ことば、沈黙、声の調子、身体の微細な動き、即興的な音の響きなどが相互に影響し合いながら進行了ました。そこで交わされた声や音は、固定的な成果物として回収するのではなく、記録や痕跡として留め、将来的にインスタレーション作品や他の芸術表現へと転化し得る素材として位置づけました。

●テーマ設定とその意図

「あなたの中にある東御をたぐる―『なぜ』ではなく『どんな風に』」

本ワークショップでは、出来事の理由や因果関係を説明することよりも、参加者自身に深く染み込んだ感覚的・主観的な経験に焦点を当てました。

それらは日常生活の中では意識化されにくく、他者から見れば取るに足らない些細な記憶である場合も少なくありません。しかし、身体感覚や情動と結びついた経験は、土地と個人との関係性を捉え直すための重要な手がかりとなります。

参加者は、「未来の視点」を仮構することによって、過去や現在の経験を直線的に振り返るのではなく、時間を折り返すようにして、自身の内にある「東御」を引き寄せ、再配置するプロセスに取り組みました。この試みは、土地を対象として眺めるのではなく、土地との関係のなかに自らがすでに「在ってしまっている」という感覚を捉え直す契機となりました。

●ワークショップ構成

本ワークショップは、以下の3つのアプローチを段階的かつ循環的に用いて構成しました。

〔観賞〕

導入として、土屋貴哉による文字作品《固有名詞を持たぬ者たち》を観賞しました。本作品は、固有名や属性による規定をいったん外し、「名づけ以前」の状態にとどまるための装置として機能し、参加者をワークショップ全体の感覚的な基調へと導きました。

〔対話〕

参加者同士の対話に加え、「1年後の未来」を想定し、その未来における《固有名詞を持たぬ者たち》の面々を手繰り寄せながら、現在を語り返す対話を行いました。ここでは、結論や合意形成を目的とせず、語りの揺らぎや途切れ、沈黙そのものを尊重する進行を心がけました。

〔音楽〕

対話の中で立ち上がった感覚や感情の微細な変化を手がかりに、各自が「しっくりくる音」を土地の自然物や楽器等を用いて探し、即興的に音を奏でる時間を設けました。音は表現の完成形としてではなく、言葉になりきれない感覚を一時的に外在化するための媒体として扱いました。

いずれのプロセスにおいても、専門的な知識や技能は前提とせず、評価や正誤の判断を伴わない場の設定としました。その結果、参加者が持ち寄った言葉や音が重なり合い、個別の記憶を超えた複層的な「東御のイメージ」が、場全体として立ち現れる瞬間が生まれました。

中動態とか自由とか —「あなたの話を聴かせてください」に寄せて—

村久保雅孝(臨床心理学者)

かつて、中動態という態があったそうです。意図を持って能動的に「する」のではなく、何か外からの作用によって受動的に「させられる」のでもない。「なる」あるいは「なりゆく」という感覚。そこに意思や意図はなく、あるのは私と私の中に生まれてくる「何か」であり、私が受け止めてしまった「何か」です。人は自覚する以上にはるかに多くの「何か」を感受しています。そのいくつかは、時により「わいて」きたり「ふって」きたり「おりて」きたり、「生まれて」きたり、さまざまなかたちで私(たち)に、それが「在る」ことを知らせてくれます。そして、時にはそれは私(たち)にとって、なんだか大切な(大切にしたい)何かだったりします。

だったら、試しにそれを大切にしてみましょう。それを、私だけにとどめず、たまたまかもしれませんが、この場を目指してやって来たひとりの仲間とともに。それは言葉や音を伴って何かの輪郭を得、よりいっそう大切さを感じさせてくれるかもしれません。そして、その大切さを伴った「何か」が、この場の仲間感受到れるとき、その「何か」は何を感じているのでしょうか。もし、その「何か」が感じているかもしれないことが私が自分を重ねることができたら、新しい表現の可能性が生まれてくるかもしれません。というより、私は、きっと、生まれてくると確信めいた感じを持っています。なぜなら、その「何か」はそうなりたがっているように思えてならないからです。

そのために欠かせないのが、「自由」です。内面と表現の自由です。しかも、ただ単に制約がないとか少ないことではありません。さらに、したいことをするということでもありません。もうかなり前のことですが、竹内敏晴(※註)さんとお話していたある時、竹内さんが「自由って、したいことをするって思っていない?」と聞いてきました。「本当はね、自由って、したくないことを絶対しないってことなんだ」と続け、「って、ルソーが言ってた」と言っただけにやにやしているばかり。ルソーのどこ、と聞いてみたが、「探してごらん」とだけ言われた私は、それが『孤独な散歩者の夢想』という、ルソーの最後の著書にあると知りました。ルソーは「私は、自由について語ってきたが、自由をしたいことをするなどと言ったことはない、自由とは、したくないことを、用心深く、しないことだ」といったようなことが書かれていました。制約がない(少ない)だけでなく、したいことをするとかしたくないことはしないとかだけでもなく、そこに喜びがあるとき、「ああ、自由だなあ」と私は思うのです。そんな自由が欠かせないと思うのです。

その過程の1つとして、いつか再び、あなたの話を聴かせてください。

— 註=竹内敏晴(1925-2009) 演出家。著書『ことばが劈(ひら)かれるとき』他多数。



私の音・あなたの音 —「あなたの話を聴かせてください」

田口友美(音楽療法士)

私は、東御市の美術館ホールに足を踏み入れた瞬間の感動を、今も忘れられずにいる。美しい景色と、その空間に置かれた1台のピアノ。ピアノに触れ、音を鳴らしてみると、それは何かを表現しようとする音ではなく、場そのものを映し出すかのように、美しく響いた。その響きに身を委ねるうちに、東御市を「理解する」という感覚よりも、ただ「そこにいる」という感覚へと導かれた。

言葉として意味づけられる以前の感覚、あるいは言葉に表せない感覚を、音を通して触れる時間を担当した。日頃、私は障害のある方々と話すことが難しい人々と音楽を介して関わっている。そこでは、言葉を持たなくても、人は音で応答し、音で他者と関係を結んでいる。その経験から、音は単なる表現手段ではなく、確かな「会話」になり得るものだと感じている。

ワークショップでは、多様な楽器のほか、東御の茶碗や、木や石といった素材から作られた音具を並べた。楽器であるかどうかは重要ではない。触れたときに音が生まれ、その音が再び身体に返ってくる。それは、自分を表現する音を意図的に選ぶというよりも、身体が思わず反応してしまう音、気づけば手が伸びてしまっている音。「音を選ぶ主体」としての自分よりも、音と出会い直すように、「今の自分にじっくり音」を探した。

その自分が選んだ音を他者が鳴らすと同じ音であっても、ある人には過去の風景が、ある人には名づけられない感情の揺れが生まれていた。言葉ではなく「音」として確かに存在している瞬間だった。

翌日には、「1年後の自分が感じているであろう音」を探した。未来を能動的に思い描こうとすると言葉は不確かになるが、音であれば、いまの身体から自然に手を伸ばすことができる。その行為は、時間を直線として捉えるのではなく、現在・過去・未来が感覚のなかで重なり合う時間経験でもあった。「中動態」という概念を借りるならば、「自分が鳴らした(能動)」でも「鳴らされてしまった(受動)」でもなく、「鳴ってしまう」という在り方に近いように思う。その感覚の中で、音に耳を傾ける時間であった。

最後に、参加者それぞれが選んだ「じっくり音」を同時に鳴らした。一人ひとりが鳴らしているのは、自分にとって最も自然な音であり、誰かと合わせるための音ではない。個々が個々のままでいながら、同時に「共に響きあう」。参加者の表情がそれを表していた。

森のざわめき、人の声、足音、遠くの気配。東御市には、すでに無数の音が息づいている。このワークショップが、そうした音に耳を澄ますことや、音を介して他者と関わることの豊かさに気づく契機となることを願っている。



ワークショップ参加者による振り返り

[参加者]

橘正人(北御牧在住・天空の芸術祭2025ワーキンググループ)

天空の芸術祭で佐賀大学のワークショップが開かれると聞き、私は大きな期待感を抱きました。今までのワークショップに比べ、今回のワークショップには是非とも参加したいと思いました。「あなたの話を聴かせてください—『みらい』と『いま』のあいだの物語」。それはようやく自分の感性に合ったワークショップに出会えるであろうと感じたからです。

8月27日に市役所で佐賀大学土屋貴哉、村久保雅孝の両氏と市担当者、我々ワーキンググループの顔合わせと群馬県太田市での取り組みを例に説明がありました。東御市という土地での自分との関わりを考え感じる、現在を10年後に置きその5年前に一体何を考え行動して今があるのか、という時空を自在に飛び交う意識の揺さぶりを想像できました。

土屋さんは我等が東御市から何を感じ取っているかを、村久保さんは日常を超えた心の動きを深く追求してゆくことを話してくれました。これらの感覚は普段の生活ではあまり必要ではなく、むしろ、天空の芸術祭ならではの味わい体験ができ、その後の意識の変化が期待できると思いました。

北御牧村と東部町との合併の時、私は仲間と共に村民の笑顔1600名を撮影しました。笑顔の中に、この地に住みどれだけ喜怒哀楽の経験が込められているかを思い尋ねながらの撮影でした。

ワークショップの2日目、会場の絵画館ロビー床には「すっと息を吸い込み喋り出す女」「日焼け止めの匂いのする女」「隙間から覗く女」などの言葉が貼り付けてありました。それは若い頃、海辺のイベントでの体験や出会いを思い出させた言葉の数々で、私はとても嬉しくなりました。

村久保さんの書かれた海中での一体感の文章から、私は妻を文字通り「手当」をしていた時、自分の手と妻の体とが1つになった感覚があったことを思い出しました。北御牧の家に引っ越しをする時、私は掌を空にむけ、また地面に向けて、「私たちはこの場所に住むことは良いでしょうか」と願うと、掌には温かい刺戟がありました。

田口さんの時間では「1年後の自分が感じるであろう音を探す」ことでした。並べられた大小の小石を叩いたりして土地の音を楽しみました。そして今際の方に耳元で鳴らすと穏やかなお顔になったというお話しは、残された家族のグリーフケアにつながると感じました。

今回のワークショップは「言葉によってあまりに個人的な想いが広がったこと」「体の感覚がさらに深まったこと」「音が安心感などの感情に響いてゆくこと」を楽しく味わいました。

[参加者]

宮下聡(東御市教育委員会)

床や壁面に転写され、ちりばめられている《固有名詞を持たぬ者たち》をスケッチした言葉たち。または、遠くで鳴り響く音たち。目にした瞬間、耳にした瞬間、脳内に映画のワンシーンのような映像(あるいは記憶)がモニタージュされていく。一瞬で鮮明な像を結んで動き出すこともあれば、霧の中からゆっくりと輪郭がみえてくるような場合もある。それらの違いは、鑑賞者個々の経験の違いや濃淡と重なっていて、脳内に現出した映像により鑑賞者の内側に沸き起こる感情も、とても個人的なものだ。だから、その映像や感情が、必ずしも他者と十分に共有できるとは限らない。それでも、自分は生まれてきた「それ」を、他者に話し



かけたい気持ちにかられた。

「中動態」という概念で村久保先生が指摘されたように、まさに「鑑賞」という行為は「思わずさせられてしまう」ものであると思う。なので、生まれてきた「それ」を他者にわかってもらいたいというより、「それ」が何なのかを確かめたいという欲求が、自分を「対話」に向かわせたのだろう。

ただし、「それ」を「言葉」にしていくことで浮かび上がるものもあれば、逆にそぎ落とされてしまうものもある。そして、その「言葉」が相手に100%意図通り伝わることは、きっと不可能だ。にもかかわらず、自分が「対話」しなくなったり「対話」の力を信じたりしているのは、「対話」から生まれてくるものの豊かさ(例えば、対象に対する眼差し方が変わる驚きなど)を味わい、受け取った経験があったからだと思う。

「わかる・わからない」「正しい・正しくない」の二者択一ではなく、その間に、喜怒哀楽と共に存在しているこの「豊かさ」は、様々な人と関わってこそ生まれてくる。今回のワークショップは、「言葉」や「音」を契機とした自分の心やからだの動きについて、改めて考えさせられたとても刺激的な機会だった。

[参加者]

阿部穂香(東御市地域おこし協力隊・天空の芸術祭担当)

自分自身が置かれている環境を慈しむ眼差しと、他人を知ること・他人に自分を知ってもらうことの純粋な楽しさ、豊かさを思い出させてくれたワークショップでした。

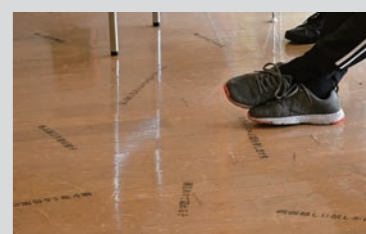
大学院を修了した春に東京から東御に移住し、半年が経った頃にこのワークショップがありました。ちょうどこの頃、半年分の新生活の疲労を感じていました。環境が変わり、これまでとは異なるコミュニケーションのあり様を目の当たりにして戸惑いを覚えていましたが、戸惑う暇もない程に仕事は目まぐるしく、なんとか順応しているふりをしながら日々をこなし、毎日荒波の中漕ぎ方を知らないボートを漕いで生き延びているような心地でした。あの時、私は周りの環境も他人も荒波のような脅威に感じていました。

ワークショップの導入で観賞した《固有名詞を持たぬ者たち》は、他人に感じていた荒波を風に戻してくれました。短いセンテンスから描かれる人の情景を想像することで、日々出会う他人が、肩書きやその人との関係性を取っ払って「ただそこにある現象」として、ユーモアを含んで立ち現れるようになりました。

そのあとの「じっくりと音を探す」ワークでは、目まぐるしく過ぎた自分の日常をゆっくり取り戻すような感覚になりました。並べられた楽器で音を試すと、東御で夜によく聞こえる音に近いものを見つけました。おそらく虫の声なのですが、東京では聞こえなかった音です。それが今は私の日常の一部になっていること、そしてその音を心地よいと思っていることに気づきました。

見つけた音を70代のペアの方と共有した際、音から20代の頃の体験を思い出したと当時の思い出を語っていただきました。その時の、私を見ているようでどこか遠くを見る眼差しが印象に残っています。

他人にも私自身にも、人にはその人の生きてきた時間分の記憶が身体に堆積していて、その形はそれぞれ違い、その形の多彩さを味わうことは絵画の色彩を味わうように豊かであることを、このワークショップから学びました。時間が経った今でも環境は時々荒波となりますが、その波の激しさや波の色を楽しむ技を貰えた気がします。



関連企画|ワークショップ

色々な素材に触れて描いてみよう ～体をいっぱい動かして描いてみる～

[概要]

日時=2025年10月30日[木] 16:20-17:35

会場=東御市立北御牧中学校

講師=村山心南(企画・準備・指導)、中野有華(準備・サポート)

参加者=北御牧中学校 美術部部員

このワークショップでは、“描く”という制作活動に新たな視点や可能性が生まれる機会として、普段とは違う制作の場を体験してもらいました。

ワークショップ会場の床(7.5×7.5m)にロール紙や和紙、布など様々な支持体を敷き詰め、その上にモチーフとして花や草木などの植物と壺を配置し、迷路をイメージした空間を講師の村山・中野で作りました。中学校美術部の皆さんはそれらを見て、床に敷いてある支持体にアクリル絵の具やクレパスを使用し筆や手で描いたり、植物自体を使って描くなど、それぞれの自由な方法で描画していききました。

植物は講師2人で集めたものを使用しました。ワークショップ前日に地元の方に案内してもらい、東御市内の山や花畑、芸術むら公園など各所で採取したり、地元の方にいただいたりして集めました。

当日は、まず講師の自己紹介とワークショップの説明を行い、その後約35分間で描画制作を行いました。絵はモチーフだけでなく、モチーフから感じたことなど抽象的なものもありました。制作終了後、描いた絵を一部残すとしたらどの部分でどのような形で残したいかを考えながら鑑賞し、ハサミを使用して実際に切り取ってもらいました。

[講師からのコメント]

一番驚かされたのは、部員皆さんの絵を描く手が始終止まらなかったことです。自由度の高いワークショップで企画側の私も少し心配でしたが、部員同士がコミュニケーションを取り、お互いに感化されながら様々な絵が広がっていく様子から創造性の高さを感じました。私の方が学ばされることが多い機会でした。部員の皆さんとも短い時間の中でたくさん話せてとても嬉しかったです。ありがとうございました。(村山)

紙や布といった支持体やモチーフを突然前にしたとき、中学生のみなさんがどのように反応するのか気になっていましたが、想像以上の飲み込みの早さに驚きました。私はサポートとして参加していましたが、みんなの熱気に影響され、“描きたい!”という気持ちが止まらず、撮影しながらついワークショップにも加わってしまいました。一緒に制作できて本当に嬉しかったです。ありがとうございました。(中野)

色々な素材に触れて描いてみようく体をいっぱい動かして描いてみるく



[1] 講師の自己紹介とワークショップ内容の説明



[2] 作業場所に移動して、作業開始前の説明を受ける



[3] 普段とは全く違った環境で制作をスタート



[4] 床面いっぱいに広がった支持体



[5] 設置されたモチーフにも反応しながら制作を進める



[6] モチーフの植物も道具として使ってみる



[7] 自分より大きな作品を描く



[8] 指や手のひらも使って表現する



[9] 最後に、気に入った箇所をハサミで切り取る



[10] ワークショップ成果物鑑賞の様子

色々な素材に触れて描いてみようく体をいっぱい動かして描いてみるく

関連企画|オープニングイベント
作品解説バスツアー

[概要]

日時=2025年10月8日[土] 13:30-17:30

会場=梅野記念絵画館・ふれあい館、芸術むら公園、北御牧庁舎ほか

芸術祭オープニングイベントとして、芸術祭に出展された全13作品の解説ツアーを行いました。アーティスト本人からの解説とともに、北御牧各所の展示会場をバスにて周遊しました。ツアー当日は近隣住民を中心に大勢の方にご参加いただきました。東御市でのインスピレーションを元に制作された作品の想いを、直接地域の方へ届ける貴重な機会となりました。



作品解説の様子(大谷さやか《時を鑄る》)



作品解説の様子(本田奈々《残光の座標—光の行方—》)

同時開催

北御牧小・中学生作品展『みんなの作品展』

[概要]

期間=2025年10月6日[月]—11月7日[金] 8:30-22:00

会場=北御牧庁舎1階市民交流サロン

出展数=249点

※会期中無休・観覧料無料

東御市立北御牧小・中学校の作品展も今年で7回目を迎えました。

この展示は普段学校へ行く機会が無い地域の方から、それを鑑賞出来る機会として好評をいただいています。今年も力作や夢のある作品が会場一杯に広がり、多くの方に鑑賞いただきました。いただいた感想の一部をご紹介します。

(天空の芸術祭2025ワーキンググループ 荻原輝久)

[ご感想の一部]

- ・それぞれの個性あふれる作品が見れて良かったです。
- ・子どもたちの作品を毎回楽しみにしています。特に低学年の子たちの自由な発想の広がりをととても頼もしく思い、見ていて楽しい気持ちになります。スタッフの方ありがとうございます。毎回大変だと思いますが、続けて下さい。
- ・とても楽しい展示でした。来年も来ます。



同時開催

東御市民による作品展『ココノビジュツ』

[概要]

期間=2025年10月18日[土]—11月8日[土] 10:00-17:00

会場=東御市商工会議所北御牧支所

※金土日祝日のみ開催・観覧料無料

出展作家=

児玉敏郎さん・画家(田楽平) 御牧絵画会(東御市内外・10名)

増田司さん・造形家(御牧原南部) 阿部芳子さん・折り紙造形家(東御市)

天空の芸術祭を毎年開催する中で、住民の中から「地元のアーティストや趣味で活動している方の作品も紹介してほしい。」という意見があがりました。そこで今年度、ワーキンググループの企画として天空の芸術祭と同時に地元住民の展覧会を開催することとなりました。タイトル「ココノビジュツ」は、WGのメンバーの提案です。ココノビジュツは東御市に隣接する市も含む「ここ」の「美術」と定義付けいたしました。全11日間の開催の中、約120名の方々に観覧頂きましたことを厚く御礼申し上げます。またご協力をお願い致しました作家、ボランティア、団体の皆様、この場をお借りし厚く御礼申し上げますと共に、お寄せいただいた感想の一部をご紹介します。

(天空の芸術祭2025ワーキンググループ 内川久芳)

[ご感想の一部]

- ・爪楊枝の工作素晴らしい。写真から作り上げたのかしら。
- ・素晴らしい油絵を見せていただき感動しました。折り紙の数々何とも感動させられました。
- ・拝見させていただいて、心が温かくなりました。芸術は素晴らしいです。いつか私も、、、と思いました。ありがとうございました。

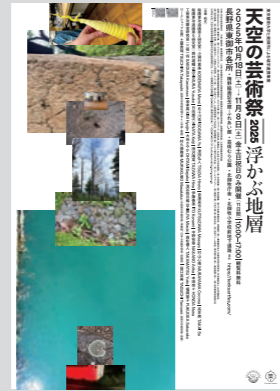


● フライヤー、ポスターの制作・配布

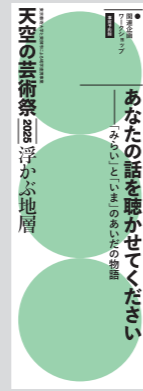
フライヤー・ポスターは市内および近隣地域の教育機関・公共施設・鉄道駅・美術館等に配布しました。また、Webでの広報やプレスリリースにて活用しました。展覧会フライヤーは東御市内へ全戸配布を行いました。



展覧会フライヤー
(A4変形)



展覧会ポスター
(B2)



ワークショップフライヤー
(A4|二つ折)

● 外部メディア掲載、出演

各種報道機関へプレスリリースを行い、外部メディアに掲載いただきました。以下、掲載情報を記します。

[新聞]

- ・ 信濃毎日新聞 10月11日 ほか

[TV]

- ・ NHK長野「NHK NEWS 長野」10月28日放送
- ・ 上田ケーブルビジョン「UCVレポート」10月17日放送

[Webメディア]

- ・ Web 長野こまち 10月6日
- ・ 長野県文化芸術情報発信サイト CULTURE.NAGANO ほか

[ラジオ]

- ・ FMとうみ はれラジ
「地域おこし協力隊活動中」「週末へのトビラ」

来場者数

開催日(11日間)の合計来場者数(イベント動員数含む) **501名**

参考：期間中の市民交流サロン来場者を含む合計 1,695名

[単位=人]

| 来場者(カウント箇所) | 東御市内(北御牧) | 県内(東信) | 県外 | 合計 |
|--------------------------|-----------|--------|----|----------|
| 梅野記念絵画館・ふれあい館(総合受付) | 65(39) | 55(36) | 44 | 299(※1) |
| 東御市商工会議所北御牧支所(「ココノビジュツ」) | 99(63) | 35(9) | 10 | 144 |
| 市民交流サロン(「みんなの作品展」) | — | — | — | 1194(※2) |
| その他 | — | — | — | 15 |

※1: 居住地未回答を含む合計来場者数

※2: 「小中学生作品展」期間内全日(10月6日-11月7日 計33日)の来場者を集計。公民館の来場者を含むことを考慮し、参考人数とした。

| イベント動員数 | 合計 |
|-------------------------|----------------------|
| オープニングイベント・作品解説バスツアー | — |
| ワークショップ「あなたの話を聞かせてください」 | — |
| | およそ 30 (バス利用者 20) |
| | 13 |

[概要]

日時= 2026年2月3日[火] 13:30-17:00

会場= 東御市中央公民館1階和室1

参加者= 計16名

東京藝術大学(7名)

教員: 小瀬村真美、西村雄輔、三枝一将、日向慶次

学生: 村山心南、中野有華、福岡桜子

東御市職員(3名)

日向大季、近藤祥平、阿部穂香(東御市地域おこし協力隊)

ワーキンググループ(3名)

橋正人、荻原輝久、内川久芳

佐賀大学関係者(3名、オンライン)

土屋貴哉、村久保雅孝、田口友美

2026年2月に長野県東御市中央公民館で、「アートによる東御市の活性化事業/天空の芸術祭2025」をめぐるセオリ・オブ・チェンジ(ToC)評価ワークショップを開催しました。東京藝術大学の教員および学生、東御市職員、運営を支えるワーキンググループ、佐賀大学関係者(オンライン)など計16名が参加しました。

ToCは、活動がどのように社会や地域の改善につながるかを因果の道筋として可視化しながら、そのプロセスを当事者で確認、明確にしていくための手法です。事前のインタビュー、アンケートで作成した暫定図をたたき台に、1)リサーチ・企画段階、2)準備・制作段階、3)展覧会・WS段階の3フェーズで人、組織、地域に起きた変化(アウトカム)を整理、更新しました。後半は付箋で、図にない自分の変化と次年度に望む未来像を言語化し、意見を統一せずそれぞれの言葉を保ったまま束ねて共有しました。

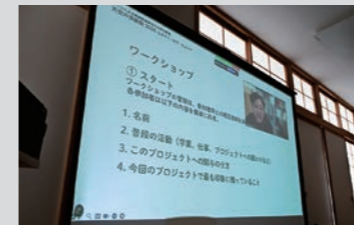
議論から、導入時の地域理解と関係構築の重要性、同じ市内でも地区ごとに文化や距離感が異なること、目的や内容の伝達不足、発信の量やタイミング、制作集中で地域接点が減るといった構造的課題が明確になりました。

一方で、制作姿勢が自己完結から鑑賞者を意識した表現へと変化し、共同作業やプロセス共有、解説ツアー、作家との対話、懇親の場が、作品理解と相互理解、納得感を高めることも確認できました。

また、その地域の外部の視点が地域資源や場所の価値を再発見する契機になること、WSと展示は無理に一体化せず目的に応じて設計する適度な距離感が重要であることも共有されました。

さらに、展示はエリアの広さや動線、車移動前提の点在配置が体験の質に影響するため、設計の見直しが必要だという指摘もありました。

総括として、地域の文脈への翻訳・調整を担う媒介者の強化、意思決定を明確にする実行委員会型運営、情報発信の拠点・方法の再設計、個人依存を減らす持続可能な仕組みの構築は、次のフェーズに進むうえでの重要な論点として整理できました。また、学生が継続的に地域と関わる場を整備することも、今後の推進に不可欠な論点として確認されました。



天空の芸術祭2025 浮かぶ地層

東京藝術大学と東御市による域学連携事業

天空の芸術祭 2025 浮かぶ地層

—

記録集

[発行]

天空の芸術祭 2025 ワーキンググループ

[発行日]

2026年3月25日発行

—

[監修]

西村雄輔、小瀬村真美、三枝一将

[撮影]

小瀬村真美、日向慶次 (pp.40-43, p.46, p.49)、中野有華 (p.45)

[編集]

五十川祐、日向慶次、阿部穂香

[デザイン]

林頌介

[印刷]

株式会社グラフィック

—

[問合せ先]

天空の芸術祭事務局

(東御市役所企画振興部文化・スポーツ振興課文化振興係)

〒389-0592 東御市県281-2

TEL: 0268-71-0670

MAIL: bunka-sports@city.tomi.nagano.jp

—

本書の無断転写、転載、複製は著作権法上の例外を除き、禁じられています。

© Tokyo University of the Arts 2026

Printed in Japan.

本事業の実施にあたり、

関係者の方々、また以下の方々に

多大なご協力とご支援を賜りました。

ここに厚く御礼申し上げます。

[協賛]

Astemo(株)東御工場

(株)ミマキエンジニアリング

(株)荻原雅史建築設計事務所

コトヒラ工業(株)

(株)マナテック 上田支店

医療法人 丸山会 丸子中央病院

(有)水科設備

(株)荒井設備

(株)竹花組 東御支店

日測設計(株)

農事組合法人 北御牧村味の研究会

社会福祉法人 みまき福祉会

(株)SHIOSAWA

(有)御菓子処 花岡

(株)日東ポタン

川西赤十字病院

タック(株)

(株)白倉ファーム

上田信用金庫 とうみ支店

信州電機(株)

八十二長野銀行 田中支店

(有)テールマウンテン

(株)東建工業

竹花工業(株)田中支店

(有)信州ファーム荻原

東京理工器(株)

東部通商(株)

(株)信州東御市振興公社

[協力]

東御市梅野記念絵画館・ふれあい館

東御市商工会

北御牧地区田楽平区

北御牧地区下八重原区

東御市立北御牧中学校

会場提供者各位

ボランティア各位

東京藝術大学と東御市による域学連携事業

天空の芸術祭 2025 浮かぶ地層

—

展覧会

[会期]

2025年10月18日[土]—11月8日[土]

金土日祝日のみ開催 | 10:00-17:00 | 観覧料無料

[会場]

梅野記念絵画館・ふれあい館

芸術むら公園

北御牧庁舎

北御牧小学校前地下通路

ほか

[主催]

天空の芸術祭 2025 ワーキンググループ

[共催]

東御市、東京藝術大学

[企画]

東京藝術大学大学院美術研究科

絵画専攻油画第2研究室

絵画専攻油画第5研究室

工芸専攻鋳金研究室

[ワークショップ企画]

土屋貴哉、村久保雅孝、田口友美

東京藝術大学大学院美術研究科



東京藝術大学大学院美術研究科

絵画専攻油画第2研究室

絵画専攻油画第5研究室

工芸専攻鍍金研究室